



建学の精神

フェリス女学院は、アメリカ改革派教会から派遣された宣教師メアリー・キダーによって1870年(明治3)に創立され、以来、日本で最も古い歴史を持つ女学校として、一貫してキリスト教信仰に基づく女子教育をその使命としてきました。

フェリス女学院において永く守られてきたモットーは“For Others”の一句です。これは、ある特定の人物が言い出したものではなく、学院に集う人々の心のなかに自然に生まれ、学校教育のなかに定着してきたものです。

フェリス女学院では、この永い伝統のなかで培われたモットー“For Others”のもと、自由と学問を尊重し、自主的で、かつ社会にあっても自己中心ではなく神と人ともに奉仕する人生を送り、つねに新しい社会を切り拓いていく自覚と責任をもつ女性の育成を目指しています。

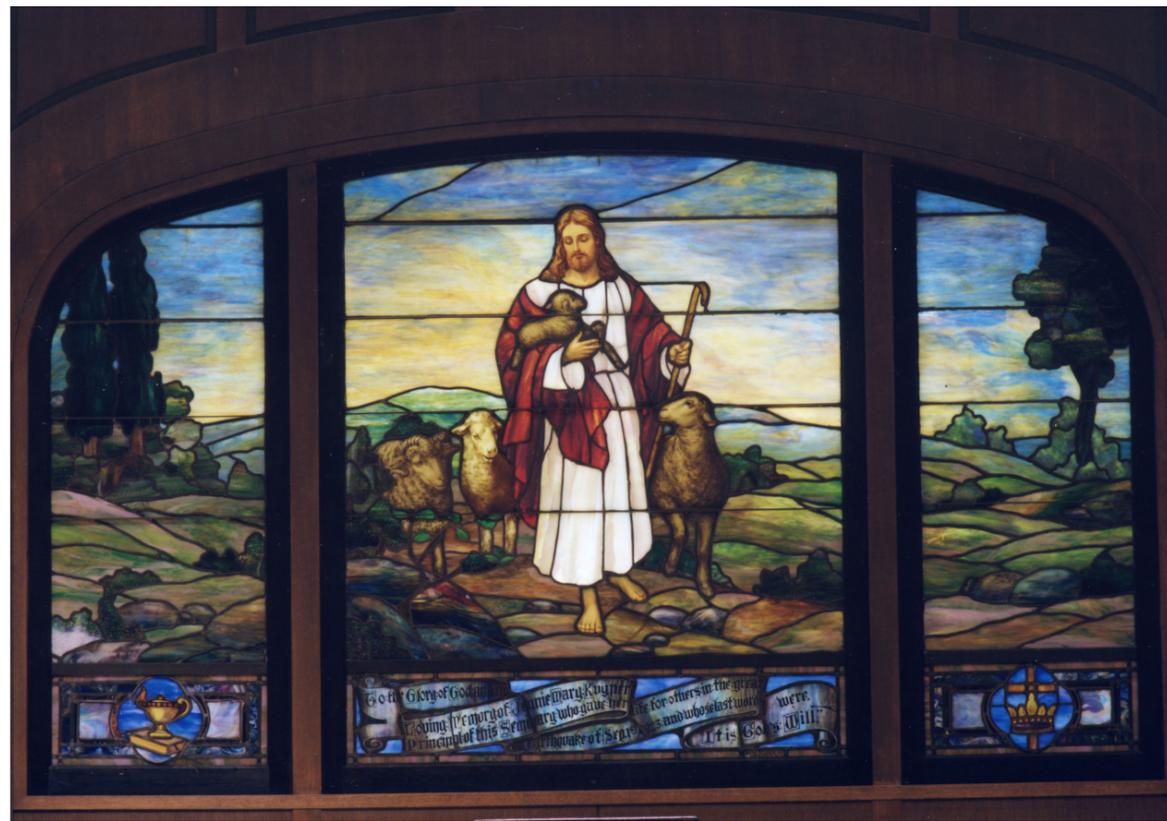


フェリス女学院 校章・マーク
神の武具である盾の中のFとSは、かつての校名〈フェリス・セミナリー〉の頭文字です。黄色は希望、赤は愛、白は信仰を表わしています。

学校法人 フェリス女学院

〒231-8660 神奈川県横浜市中区山手町178

TEL : 045-662-4511 FAX : 045-651-4630



創立

1870年(明治3)7月、新潟の宣教活動から横浜に戻ったメアリー・E・キダーは、9月より居留地39番のヘボン夫人の私塾を引き継ぎ、授業を開始しました。しだいに評判を呼び、翌年には女子のみを教えるようになり、〈キダーさんの学校〉と呼ばれるようになりました。

ヘボン施療所が手狭になったため、新たな学校施設を求めていたキダーに、時の県権令(県知事代理)の大江卓は、伊勢山(現在の神奈川県立音楽堂付近)に建設中の県役人宿舎の一棟を貸し与え、机や黒板その他の備品を整えてくれました。また、山手の住いから伊勢山までの3kmの道のりは、歩いて毎日通うには大変だろうと、大江は自分のポケットマネーで人力車を用意しました。キダーはとても規律正しい性格で毎日同じ時刻に通るので、町の人は彼女が通るのを時計代わりにしたといわれています。

江戸時代から続いたキリシタン禁制の高札が撤去されたのは1873年(明治6)のことですから、キダーの伝道はかなり危険を伴うことだったと思われる。

キダーは1873年(明治6)7月10日に10歳年下のロゼイ・ミラーと結婚します。結婚後は、夫のミラーが長老派からアメリカ改革派へ移ることによって、夫婦で協力して学校運営を続けました。また宣教師たちは、熱心に地方を回って名家を訪ね、新しい時代の女子教育の必要性を説いたので、汽車もない時代に、山手の丘にできた異人の学校に、日本各地から少女たちが集まってきました。菅笠をかぶり、わらじ履きで、何日もかかっていたどり着く者もいたといえます。

ミセス・ミラーとなったキダーは、日本伝道にとって女子教育こそが必要であり、そのため本格的な学校を建設したいとアメリカ改革派外国伝道局本部に訴えた結果、建築費5500ドル(主に日曜学校児童献金による)が寄贈され、1875年(明治8)6月、山手178番に寄宿学校が完成しました。校名はアメリカ改革派教会外国伝道局総主事アイザック・フェリスとジョン・メーソン父子の名を記念して〈フェリス・セミナリー〉と名づけられました。

創立の背景と歴史

メアリー・E・キダーは、アメリカ・バーモント州の小都市に生まれ、21歳のとき、多くの宣教師を輩出しているモンソンアカデミーに入学しました。のちにキダーを女性宣教師として推薦するサミュエル・R・ブラウンとはこの学校時代に会ったと思われます。1858年にはニューヨーク州オーバンにあるブラウンの学校の教師となりました。

1859年(安政6)にブラウンが日本への宣教に出発した後、プライベートスクールなどの教師をして自活する一方、ブルックリンでの慈善事業や日曜学校運動に積極的に参加していました。

1869年(明治2)8月、35歳で女性宣教師として横浜へ到着。ブラウンの任地である新潟に向かいました。当時の新潟には、せいぜい20~30人ほどこ外国人がいなかったため、人々の好奇の目にさらされながらも、日本の環境を積極的に学び、英語を教えました。新潟海岸の松林によく散歩に出かけたらしく、群生するオオマツヨイグサ(月見草)は、キダーがその種を蒔いたのが始まり、といわれています。

1882年(明治15)4月、ミラー夫妻はフェリスを退きました。在任期間は1870年(明治3)から1881年(明治14)でしたが、彼女の働きはフェリスにとって大きな財産となりました。東京・築地の居留地29番に住いを移し、地方伝道の仕事に専念、高知、広島、信州、仙台、盛岡、北海道を訪れ、布教活動を行ないました。また、三浦徹牧師の協力のもとキリスト教月刊誌『喜の音(よろこびのおとずれ)』、『小さき音(ちいさきおとずれ)』の編集・発行を引き受け、全国各地に予約購読を広め、キリスト教関係雑誌の中で最大の発行部数となりました。

1888年(明治21)6月寒冷の地 岩手の盛岡に移り、14年間にわたり伝道活動にあたりました。ミラーはバイブルクラスと英語クラスを開き、ミセス・ミラーも雑誌の編集を続けつつ夫のクラスを手伝い、教会堂の建設や信徒の獲得に力を注ぎました。以前から身体の不調を訴え、休むことが多くなっていましたが、1900年(明治33)5月、66歳のミセス・ミラーは東京で乳がんの手術を受けました。手術後は盛岡の住まいを引き払い、日本永住を決めた夫妻は、治療のために東京に戻り、ミラーは明治学院理事として学校経営にあたりました。70歳を過ぎたミセス・ミラーは再び体調を崩し、1910年(明治43)6月、苛酷な闘病生活の末、76歳の生涯を閉じました。亡骸は染井墓地に埋葬されましたが、1940年(昭和15)フェリス創立70周年の際、卒業生の希望により、横浜・山手の外国人墓地に移されました。

ミセス・ミラーの跡を受けて2代目校長に就任したユージン・S・ブースは、41年間、文字通り生涯をフェリスに捧げました。強い信仰の持ち主だっただけでなく、優れた実務家として手腕を発揮し、フェリスを塾から学校へと発展させた功労者です。ブースは、フェリスを宣教師主導ではなく、日本人主導の日本の学校にすべき、というはっきりした意志を持っていましたが、文部省に認可された高等学校は宗教教育が制限されるため、断固とした態度で「各種学校」の地位に甘んじました。1941年(昭和16)英語が敵性語とされた時代には、学校の存在する地名を冠して〈横浜山手女学院〉に校名を変更しましたが、1950年(昭和25)再び〈フェリス女学院〉と改称して現在に至っています。



創立者 Mary E. Kidder (1834~1910年)
キリシタン禁制の時代から、
日本での宣教と女子教育に献身しました。

